

宮沢賢治の童話を
落語仕立てで語る

賢治寄席へようこそ II

宮澤哲夫 著



まえがき 賢治寄席への招待

本書『賢治寄席へようこそ』は、宮沢賢治の作品を読み合い、ともに豊かな賢治ワールドを楽しもうと、二〇一五（平成二十七）年に発足した「三鷹大沢・宮沢賢治の会」の会員用配布プリントを基にした『賢治寄席へようこそ——さても楽しき物語たち』をまとめたものです。賢治作品に親しめるようにと、文体を落語の語り口に求めてみました。

各話は、ひとつの作品を二回で完結させるため、「前半の部」と「後半の部」に分けました。前半では作品の流れを概観し、全体像を浮かび上がらせることを目的として、一般的な見解と思われる読みをとりました。

後半では、いくつかの違う角度からの光線が、思いがけない面を照らし出すかもしれないと考えました。作品の気になる箇所に補助線を引いてみる、あるいは水底の状態を探るため錘おもを下ろしてみる、そんな意図によるものです。

具体的には、物語の主人公でないマイナーな人物の視点からの読み直し、また架空の人物からの発言などを試みました。ときには、いわゆる〈裏読み〉を、また講演会や座談会などを開催し

たりして、興味をもって読んでもらえることを心がけました。

賢治作品をさらに親しんでもらおうと、理解しやすく親しめるような文体を使いたいと、語り口は（見よう見まねで）落語を参考としました。

このおしゃべりの中には多くの賢治研究者の見解が含まれておりましょう。本書は宮沢賢治の研究書ではありませんし、このような語り口のため、論考であれば本来は「注」として別記すべき論者のお名前を特に記すことはしておりませんが、多くの学恩に感謝申し上げ、ひたすらご海容を願うばかりです。

なお、賢治の作品は現代表記に改められている『宮沢賢治コレクション』（筑摩書房）から引用させていただきました。（ふりがなは省略、また補足しました）

【もくじ】より

- 第十一席 「蜘蛛となめくじと狸」(前半の部) われら三人マラソン選手
- 第十二席 「蜘蛛となめくじと狸」(後半の部) 回顧欄からご登場の方がた
- 第十三席 「気のいい火山弾」(前半の部) 苔は、むしられて泣きました
- 第十四席 「気のいい火山弾」(後半の部) ベゴ氏を偲ぶ座談会
- 第十五席 「革トランク」(前半の部) さていっぱい詰め込みます
- 第十六席 「革トランク」(後半の部) 敏腕記者の取材報告メモから
- 第十七席 「月夜のでんしんばしら」(前半の部) 歩け、歩け、さあ歩け
- 第十八席 「月夜のでんしんばしら」(後半の部) 対談「百年むかしは」
- 第十九席 「鹿踊りのはじまり」(前半の部) おれも鹿だ
- 第二十席 「鹿踊りのはじまり」(後半の部) 愛^えどしおえどし

以下は「I」所収

第一席「どんぐりと山猫」(前半の部) いざ裁判へ

第二席「どんぐりと山猫」(後半の部) 吾輩は山猫である

第三席「水仙月の四日」(前半の部) あわや子供が……

第四席「水仙月の四日」(後半の部) へとられた子・雪童子

第五席「猫の事務所」(前半の部) これこれ弱いものをいじめてはいかん

第六席「猫の事務所」(後半の部) 三毛猫はつらいよ

第七席「カイロ団長」(前半の部) ちよいと一杯のつもりで呑んで

第八席「カイロ団長」(後半の部) へカイロ団長の謎にせまるまあ仰々しい

第九席「祭の晩」(前半の部) 山男が嬉しがって泣いてぐるぐる

第十席「祭の晩」(後半の部) われは山の神にいささか縁ゆかりあるもの

第十三席 「気のいい火山弾」 (前半の部) 昔は、むしられて泣きました

ええー、三鷹の皆さまがた、令和二年もそろそろ八月になりますのに毎日の雨、それにコロナ禍で、毎日が蟄居閉門ちつきよの身でございます。それにもかかわりませず、にぎにぎしくお出でいただき、ありがたいことですね。厚く御礼を申しあげます。

さてつと、なんですね、この頃は小学生も英語の勉強とかで、大変だそうでございます。

昔はそれっ中学生になったというので、英語を始めたもんでございます。急に偉くなったような気がいたしました。

そのうちにだんだんと授業も進んでいって、分からなくなる。受け身だ、受け身だといって「受動態」なんかを習います。「する側」と「される側」がある。ぶん撲なぐるやつがいれば、ぶん撲られるやつがいる。食べるやつがいて、食べられるやつがいる。これで世の中の仕組みの半分が理解できるわけで。

さてここで、ええ、まことに突然で恐縮ではございますが、今席は賢治さんの「気のいい火山弾」でございます。

さて、皆さまがた、今あなたがたはどこにおられるか。

と言いますのは、これがいつもの会場ではありません。風が吹いております。悠久の太古からの風でございます。

ここは岩手山麓に広がる裾野でございます。

遙か大昔に岩手山が盛大に噴火しました。今、目の前の荒涼とした岩肌の広がる台地に、噴火によって噴き飛ばされてきた岩たちがごろごろと散乱しております。もう柏の林も広がり、あたりは草で覆われております。香しい風が吹き渡っております。

目をそっと前にお寄せいただくと、ほら目の前に丸い黒い石、これが賢治さんの「気のいい火山弾」の主人公ベゴ石でございます。その回りのごつごつした稜かどのあるたくさんの石たち。岩手山の胎内から吹き飛ばされてきたみな兄弟でございます。

このお話はこのベゴ石をめぐって展開してまいります。

ベゴ石は気のいいと表現されておりますように、しごく気立てがよくって怒ったことがない。私めとそのあたりが違う。それだからかえって、からかわれる対象となります。

からかいはまず外見からでございますな。

まわりの小さくって逞たくましい立派な稜だらけの岩たちに較べると、小太りですんぐむつくり。は

なはだ頼りない感じがいたしますな。

そのうえに気がいいというので、周囲はもう、なんだかんだと言い囃はします。お腹の痛いの治療たかだとか、梟ふくろうが唐辛子とうがらしをもってきたかだとか、野馬が小便をかけなかったのかと、もつと酷ひどいのは、新しい法律で丸いものはパチンと割られるぞとか。

しかしベゴ石は柳に風と受け流します。これじゃ、はなつから、いじめになんかにやなりませんや。

初めのうちの仲間の石たちのからかいが、そのうちに他のものたちにと拡大してまいります。

石たちは体つきこそ違え兄弟です。まあ同じ鉱物だからいいとしても、それが植物だとか虫なんぞが加わってくると、少し気になりますな。

柏は少し大きくなつてうぬぼれます。おみなえしは花を咲かせ、黄金の冠をかぶつたなんて喜ぶのですな。ベゴ石の頭に生えた苔さえもすっかり馬鹿にする有様です。ちつぽけな蚊までがベゴ石を無駄なやつだなんて言います。

そのあたりから順に見ていきますと、まず柏でございます。

ベゴ石の傍そばにやつと芽を出したときは、雪や風から守ってもらったのですが、だんだんと大きくなって五倍もの背丈になると、もうすっかりうぬぼれてしまつて、枝をピクピクさせております。どなたも経験がおありでしょうか。高校などで二年生、三年生ともなりますと、先生をすっかり馬鹿にして仲間うちで話しますな。あれです。

そして次にはおみなえしの登場です。

花が咲いて初めて黄金の冠をかぶりました。さっそくベゴ石に自慢して見せびらかす。あなたはいつかぶるのかと聞いて、まだかぶらないよと返事を聞く。これでベゴ石を小馬鹿にし始めた。自分は他より優れているぞ、なんて思つてうぬぼれると、後はロクなことにはなりません。能ある鷹は爪を、でございますぞ。

十日ばかりしますと、ベゴ石も赤ずきんをかぶります。秋になつて苔が赤くなつてきたのですな。

その赤ずきんは苔のかんむりでしょう。わたしではありませんとベゴ石は申します。奥ゆかしいですな。それからこう言つたのですな。

「私の冠は、今に野原いちめん、銀色にやつて来ます」

おみなえし、それを聞いてびつくりです。それはあの恐ろしい雪です。

もう口もきけません。すっかり気落ちしてしまいます。

今は色とりどりの秋の景色が、またたくまに雪に覆われるのです。これは毎年のごとで、仕方のない自然現象でございますな。

「雪が消えたら、きつとすぐ又いらつしやい」とベゴ石はおみなえしに慰めの言葉をかけます。でも、もうおみなえしはため息ばかりで、返事もできません。毎年そんな自然の移り変わりをベゴ石はどれほど見てきたのでしょうか。何千年も、何万年も。

次の日です。今度は蚊が、くうんくうんと、鼻歌まじりにうなつてやつてまいります。

「この野原には、むだなものが沢山あつていかんな」と小生意気なことを申します。

「ベゴ石のごときは、何のやくにもたない」と言います。

ベゴ石は「むぐらのようにつちをほつて、空気をしんせんにする」こともないし、「草つばのように露をきらめかして、われわれの目の病をなおすということもない」からだなんてご大層なことを申します。

土竜もぐらが土を掘つて空気を清浄にしているとは初耳、また草葉の露が蚊の眼病の妙薬であることも私は知りませんでした。

そのちつぽけな蚊のご高説を耳にして、ベゴ石の頭の上の苔がすっかりベゴ石を馬鹿にいたします。こんな歌をうたいながら踊りだしたのです。

ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

あめがふつても黒助、どんどん、

日が照つても、黒助どんどん。

ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

千年たつても、黒助どんどん、

万年たつても、黒助どんどん。

このへんな歌をベゴ石は「うまいよ。なかなかうまいよ」と笑いながら、褒めた後に、こんなふうに語ります。

「しかしその歌は、僕がかまわなけれど、お前たちには、よくないことになるかも知れないよ」
自分は馬鹿にされても、そんなことは構わない。でも苔ははずれは枯れてしまうものです。そんな苔が、雨だとか日だとかの大自然や、千年だとか万年だとか、悠久の時間などを、相手を馬鹿にする材料に使っておる。

永久とも思えるほどのはるかな時を過ごしてきたベゴ石に向かって、一瞬の生命にしか過ぎない苔が、なんと「大自然と悠久の時間」を嘲りの歌に使ったのですな。

それはいかんぞとベゴ石はたしなめた。

だけど相手はそれに気がつかない。よくある話ですな。

それでかわりにこんな歌を作つてあげます。こんなのです。

お空。お空。お空のちは、

つめたい雨の ザアザザ、
かしわのしづくトンテントン、
まっしろきりのポッシャントン。
お空。お空。お空のひかり、
おてんとさまは、カンカンカン、
月のあかりは、ツンツンツン、
ほしのひかりの、ピッカリコ。

「水と光」、これは自然の象徴でございます。苔を含むあらゆる生き物がこの恩恵を受けて、せいっぱい生きてほしいという、ベゴ石のせめてもの贈りものでしたが、あっさり「そんなものだめだ。面白くもなんともないや」と断わられた。

ベゴ石、淋しかったでしょうな。ますます周囲の嘲りは大きくなって、ついに絶交だという事態にいたります。

初めのうちは同じ仲間の石たち、それに柏だのおみなえしなどの植物たち、やがては蚊なんぞのちつげな連中が加わり、苔にいたっては囃子はやしうた歌まで作っての大合唱です。全くの四面楚歌。どうこれが動いていくのか読者としては気懸りであります。

さて、意外な幕引きのきっかけとなったのが、人間であります。いろいろなピカピカする器械

を持ち、「眼がねをかけた、せいの高い立派な四人の人たち」でございます。

一人が「あ、あった、あった。すてきた」と声をあげます。何があったのでしょうか。
みんなベゴ石のところに集まります。

「すてきた。実にいい標本だね。火山弾の典型だ」なんて言っております。

「こんなととのつたのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしていることね。もうこれだけでも今度の旅行は沢山だよ」だとか「大英博物館にだつてないぜ」とかもう大騒ぎです。
いったいこれはどうしたのでしょうか。

人間のしかも大のおとなたちが、さんざん馬鹿にされ、絶交さえされているベゴ石を囲んで、なでたりさすったりして興奮しております。あの変んな帯に触つて「この帯の完全なのはない」だとか「どうだい。空でぐるぐるやった時の工合が、実によくわかる」、「すてき、すてき。今日すぐ持つて行こう」なんて言っております。

まわりの石たち、思わずゴクリと聞き耳をたてます。「りつぱ」だとか「すてき」だとか「完全だ」なんて、どう考えても意外です。

でもやっと分かりました。これまで馬鹿で手がつけられないと思つていたベゴ石がじつは優れていたのですな。稜かどのある石たちはもう黙ためいつて溜息をつくばかりです。なにか言おうとしても言葉もないのでしょうか。

ベゴ石は「火山弾」、稜ある石たちは「火山角礫かくれき」と言うのだそうですな。

火口から噴出したマグマが空中で回転しながら落下した。それが火山弾。ベゴ石はその典型的な立派なやつ。気絶していて、ばらばらと飛び散ったのが稜のある火山角礫。同じマグマからのいわば同胞、ほんとうの仲間ですな。姿形が違っていても、世の中だれが親戚かわかりません。世界的にも稀な火山弾の典型として評価され、ベゴ石は「どうだいほんとうは僕のほうが偉かったのだ」なんて威張ったのですかな。

とんでもない。

そんなことは人間が勝手にそう言っているだけで、僕はいつもの僕で充分、ベゴ石はあいかわらずのベゴ石で充分、そう思っていたにちがいありません。

荷馬車がやってまいります。ベゴ石を連れて東京帝国大学校地質学教室というところに行くんだそうです。「たいせつな標本だから」というので丁寧なきれいな藁わらや蓆むしろで包まれます。「苔なんかむしってしまおう」と苔はむしられます。苔は、むしられて泣きましたな。

そして別れの場面となります。ベゴ石は「みなさん。ながながお世話でした」と言つて、苔には「苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたつて下さい」と言います。

「みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん」

これが皆が耳にしたベゴ石の最後の挨拶です。しみじみとした別れの場ですな。

むしられた苔にはこの歌を歌う機会はもうなかったと思いますよ。歌う前にもう枯れてしまつたでしょうからな。

でもベゴ石との別れを一番悲しんだのはこの苔ではなかったのか、こう私め考えております。稜のある石たちは、身体つきによって馬鹿にする理由もあった。兄弟どうしのふざけ合いみたいなもので、いくらからかったと思っても柳に風で、ベゴ石には通用しなかった。からかいにもならなかったのですな。

柏の木にしたって、自分が大きくなったので少しうぬぼれていただけで、心からベゴ石を馬鹿にしたわけではない。

おみなえしだって、はじめは馬鹿にするつもりだったのに、逆におびえてしまったのですな。多年草の植物だから毎年雪が消えればまた咲きます。だが半年間の雪のつらさを思い出してしまった。いっばしの生意気な評論家の蚊におよんでは、ベゴ石にとっては痛くも痒くもない、まさに蚊に刺されたほどの痛痒つうようもなかった。

ただ苔だけは違います。宿主やどぬしの頭に寄生した立場を忘れて、あまつさえベゴ石を押搦やぶする歌まで歌った。しかも大自然と悠久なる時間をも冒瀉ぼうとくした。ベゴ石から忠告にも等しい歌の贈与を受けた。しかしそれを拒んだ。こう大袈裟に考えれば、苔の後悔の情が最も強かったのではないかと感じられるのでありますな。「苔は、むしられて泣きました」というなげない表現に私めはグツとくるのですよ。

そして、ベゴ石の最後の言葉がまたいいのですな。

「私の行くところは、ここのように明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、

みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん」

なかなか言えることではありません。これからの行く先は予想もつきませんが、「ここは明るい楽しいところだ」と言いきっております。

いつもの仲間と大自然の中に存在していたことがベゴ石にとっての幸せであったのですな。たとえ立派な標本として珍重されようとも、それがほんとうの幸せかと、連れていかれる不本意さを滲ませた別れの言葉です。でも自分でできることをするのだと決意をも表明しております。

さて皆さま、ここでさきほどの「する側」に対する「される側」の「受動態」を思い出してください。

人間は連れていく側、ベゴ石は連れていかれる側。ベゴ石は諦めの境地にまで達しております、あれこれ抵抗はしませんでした、私めだつたらひと暴れするかもしれませんが、大泣きをするかもしれません。

さて次席はこの作品にご登場の皆さんがたにお集まりいただき、ベゴ石を偲ぶかたちの座談会でも、と計画しております。

これからその交渉に入りますが、次の席の開催までに間に合いますかどうか。司会はどうなにご願ひしようかと悩んでおります。ご期待ねがいます。

では三鷹の皆さま、またのお越しをお待ちいたしております。お元気でお過ごしくございますように。



岩手山の焼走り溶岩流 噴出口から末端まで3km、幅1.5kmにわたって溶岩が固まった火山角礫が見られる。享保4年（1719）の噴火によるものである。

第十四席 「気のいい火山弾」 （後半の部） ベゴ氏を偲ぶ座談会

〔司会・まんまる大将こと日輪太郎〕 本日はこのような上天気で（じつに光榮であります）、はなはだ結構でございます。

私、遙かかなたの天空より、司会の役を務めさせていただきます「まんまる大将」こと、日輪太郎であります。いつも太陽系の真ん中で光っております。

本日、皆さまがたにお集まりいただきましたのは、数十年もの昔、東京帝国大学校地質学教室へとやむなく赴かれた栄えある火山弾ベゴ氏を偲び、縁ある皆さまがたにいろいろと語り合っていたかどうかと「ベゴ氏を偲ぶ座談会」と銘うちました偲ぶ会の開催のためでございます。

岩手山麓いつもの場所での開催であり、ここにベゴ氏さえおればまさしくオールスターキャストでございます。出席の皆さまがたは、顔見知りの方ばかりかと思えますが、中にはほんの一瞬この場所に立ち寄っただけの方もございます。発言の折りにご紹介いたします。

まずベゴ氏の人となりや、名前の由来などからご発言いただきます。それはもう何と言つてもご兄弟、同胞である「稜ある石一家」ご長男稜太さんからお話を伺います。

〔稜太〕大昔からじつとここに座つて同じ顔ばかり眺めてきたので、改めて名乗るのもどうかと思うが、稜ある石一家の稜太であります。ベゴ氏、ベゴ氏というから誰かと思えば、ベゴしか呼べないから、わしはベゴと呼ぶ。

ベゴというのは、そこで草を食っている牛のことだ。それから付いたあだ名だから、あいつの本名などおれは知らん。ベゴはベゴだ。

〔稜二〕そうだ、兄さんの言うとおりで。おれもベゴとしか呼ばね。あんな身体つきだからそれはそれで仕方ない。どうだ、みんな。

〔稜子〕そうよ。ベゴよ。

〔稜江〕私もそう思うわ。なによ、あんなやつ。ただのベゴじゃないの。

〔司会〕ああ、不規則発言はどうかお控えを。それではベゴ氏でなく、これからはベゴと呼ぶことにいたします。どうしてそう呼ぶのか、どなたか。

〔稜二〕それはな、司会者は、いわば同胞だと言うけれど、少しもおれたちとは似ていない。なんだいいあいつの身体つき。おれらよりでかいけどまん丸だ。色が黒いくせにへんな白帯なんか締めて。だいいちおれたちみたいな立派な稜がない。ずんぐりむっくりのおかしなやつだ。

〔稜子〕そうよ。私たちがみたい稜がないもの。

〔司会〕 ああ、ありがとうございます。ベゴについての人となりなどお聞かせいただきたいのですが。

〔稜太〕 一言でいうなら阿呆あほうさ。気がいいというのか、何を言っても笑っているだけだ。

〔稜二〕 ほら霧がかかってくるだろ。あたりはまっ白だ。それでおれたちは退屈まぎれにあいつをからかうんだ。退屈だけじゃない、何にも見えんから不安にもなるからな。お腹の痛いのが治ったかいとか、野馬が夜中に小便をかけたかいなんて言ってからかかったもんだ。

〔稜子〕 新しい法律の話のときは面白かったわ。丸いものはパチンと割られてしまうって。

〔稜江〕 そうしたら、まんまる大将といっしょなら割られたっていいだつて。

〔稜太〕 そうそう、みんな大笑いさ。どうも馬鹿で手がつけれない。

〔稜二〕 噴火の時にいっしょに空から落ちたのに、どうして身体つきが違うって話になったと気があつたらう。そしたらあいつクルクル身体が回ったなんて言ってた。おれたちはじつとしていたのに、あいつは臆病だったんだ、きつと。あのときの音や光は大変だったからな。クルクル回って落ちたんだ。おれらこんなに稜がしつかりしてるのにな。

〔司会〕 では他のお方はいかがでしょう。柏さん、どうでしょう。

〔柏〕 あの方の、ええベゴ石せきさんの傍そばで何年かを過ごさせていただいたのですが、お人がらといえ、やはり気がいいとしか言いようがありません。

初めて私が芽を出したとき、とても大きくて怖い感じもりましたが、すぐに気のいい方だと分

かりました。私には、まるで大きな山でした。

何年かするうちに、ベゴ石さんの背丈を追い越し、すぐに私の方が大きくなりました。若かったからです。五倍にも大きくなって、すっかり生意気になり、枝をこんなぐあいに大きくピクピクさせて自慢したりしました。

小さい私を雪や風から守ってくれたのに、そんなこともすぐに忘れて、自分の力だけで大きくなったような気がしてしまいました。今こうしてあの方を偲んでみますと、私が愚かだったとしか申せません。いい方でした。

〔司会〕 いいお話、ありがとうございます。

まだまだご縁のある方がおいででしょう。おみなえしさん、どうぞ。

〔おみなえし〕 あれは僕が黄金の冠をかぶったときのことでした。ベゴ石さんにそう言うとおめでどうと言ってくれました。嬉しかったですね。

それで僕は聞いてやったんです。「あなたはいつかぶるのですか」って。

そうしたらかぶらないって返事です。それを聞いてすっかり僕は嬉しくなって「お気の毒ですね」と言ってからよく見ると、ベゴ石さんの上にも冠がありました。

それを見て「あなたももう冠をかぶっている」と言ったら「これは苔ですよ」と苦笑いをされました。ほんとうはその苔のこと、嬉しかったのでしょすが。

〔司会〕 ほう、それでどうなさいましたか。

「おみなえし」それから十日ばかりして、びっくりしました。ベゴ石さんの上の苔が赤ずきををかぶっていたのです。

「おめでとう」って、思わず声をかけましたら、また苦笑いをされて、「その赤頭巾は苔のかんむりでしよう。私ではありません」とこうでした。

それから遠くを見るような顔つきで、「私の冠は、今に野原いちめん、銀色にやっ来て来ます」と言われました。聞いたとき急にぞつとして。

ええ、あの恐ろしい雪です。その長くて辛い雪の時期がもう近くまででした。すっかり忘れていたのに、思い出すともう口もきけません。

それで……。

〔司会〕それで、どうなされたのでしょうか。

「おみなえし」すっかり気落ちした僕にこんなことを言ってくれました。

「雪が来て、あなたはいやでしょうが、毎年のごとで仕方もないのです。その代り、来年雪が消えたら、きつとすぐ又いらつしやい」って。

ベゴ石さんの慰めの言葉もそのときは耳に入らなかつたですね。ああ、その雪が消えて、まっ先にベゴ石さんに逢いにきたのに、もうそのベゴ石さんは、いなくなつた。

(涙ぐむ)

もう遠くに行つてしまつたと皆が言つて……。 (泣く)

〔司会〕 その気持ち分ります。そんな方だったのですか。次にそこで手を挙げている……

〔蚊〕 わしは、蚊の茅野好太郎と申すもの。ご一統さん、お見知りおきのほど。

諸国漫遊の旅の途中、たしかこの地にやってきたことがあった。ふんふん、ベゴという石がおつた。

「ベゴ石のごときは、何のやくにもたたない」

こう感じたゆえ、そのように申した覚えもある。

何故かと申すに、土竜は土を掘り空気を清浄にいたし、また草つ葉は露をきらめかし、われらの目の病を癒す。かかることもできぬ無能なるただの石とわしは見た。この野原にはかような無駄なものがいっぱいだ。かく感じて、この地を去った覚えがある。

〔司会〕 旅のお方からの感想でございました。

では先ほどから話題にもなっております苔さん、ご発言をどうぞ。

〔苔〕 苔の冠二郎です。私は先ほどのおみなえしさんの話にも登場しました、ベゴ石さんの頭の上に生えた苔であります。

あんな人格者の頭の上をお借りして大きくなったのに、そのご恩も忘れ果てたまさに忘恩の徒であります。

先ほどのあの旅の方、ええと、蚊の茅野好太郎さん、そのベゴ石無用論を耳にして私もすっかりベゴ石さんを軽んじてしまいました。なんとも軽率なことではございました。

もとはと言えば、頭の上を一時借りただけのいわば店子、ベゴ石さんは大家さんであります。世が世なれば親も同然、子も同然。その恩人をすっかり馬鹿にってしまった私は愚かにも歌まで作って嘸はしたてて……。 (黙り込む)

〔司会〕で、その歌とはどのような。

〔吾〕とても人前で披露できるものではありません。でもぜひにと言われるのでしたら。

「ベゴ黒助、ベゴ黒助、黒助どんどん、あめがふつても黒助、どんどん、日が照つても、黒助どんどん。ベゴ黒助、ベゴ黒助、黒助どんどん、千年たつても、黒助どんどん、万年たつても、黒助どんどん」

このような稚拙なものです。ベゴ石さんは「うまいよ、うまいよ」と褒めてくれました。

でも「その歌は、僕がかまわないけれど、お前たちには、よくないことになるかも知れないよ」と言われて、別の歌を作ってくれました。私が馬鹿にして作った歌は気にされないで、かえって私のことを気にされたのです。

〔司会〕それって、どういうことなんですか。

〔吾〕私ら昔はいずれは枯れてしまうもの。今になって思えば、雨だとか、日だとか、千年だとか万年だとか、それを相手を馬鹿にする材料に使った。それを気にされてくれたのかもしれない。せん。

〔司会〕なるほど。それで作ってくれた歌とはどのような歌でしょう。

「吾」 こんなのです。

「お空。お空。お空のちは、つめたい雨の ザアザザ、かしわのしづくトントン、まっしるきりのポッシャントン。お空。お空。お空のひかり、おてんとさまは、カンカンカン、月のあかりは、ツンツンツン、ほしのひかりの、ピッカリコ」

これを私が「そんなものだめだ。面白くもなんともないや」って言うと、ベゴ石さんは淋しそうに「僕は、こんなこと、まずいからね」って言ったきりでした。

こんな僕みたいな苔に馬鹿にされていると回りは思ったんでしよう、それからベゴ石さん、みんなの嘲りのまま。でもじつと黙っておられた。

「司会」 そうでしたか。それで様子がはつきりしました。そしてあの衝撃の日がきたのですね。人間が現れてベゴ石さんを無理やり連れて行ってしまった。あの時を迎えて、皆さん、いかが感じられましたか。一言ずつお願いいたします。

「稜太」 ううん、ここでいろいろ聞かせてもらった。今ますます馬鹿にしていたベゴが、なんと大英博物館級の火山弾だとありがたがって連れて行かれた。

だけど、いくら大切にされても、ベゴはベゴだ。おれたちや稜かどがある。おれの考えは変わらん。まったく変わらんぞ。うん。

「稜二」 いや兄さん、僕はすこし違うな。話を聞いていて、だんだんあいつが分かってきた気がする。馬鹿だと思っていたけれど、ベゴのやつを見なおした。急に会いたくなつた。

〔稜子〕私は稜太兄さんと同じで、馬鹿は馬鹿、ベゴは永遠の馬鹿でいい。でもちよつと違う馬鹿。そうね、ここにいないとやつぱり淋しい、そんな馬鹿。

〔稜江〕 いてくれたらもつと楽しかったかもね。今、淋しすぎる。賑やかなほうがいい。

〔柏〕 私も大きくなつてすっかりうぬぼれておりましたが、考えてみれば、保護者の役目をしながらも、一言もそんなことを口にされない、そんな方でした。立派な名前を持っていたそんな方だとは思えぬ、人格者でした。行つた先でどんな境遇にあるのか分りませんが、今はお幸せであることを祈るばかりです。

〔おみなえし〕 今から何を言つてもみんな弁解やら言い訳になつてしまいます。初めは私も馬鹿にしておりました。春になつて一番先に駆け付けたときには、もういなくなつた。いつまでもここにいてほしかつたのに、残念です。淋しい。

〔蚊〕 俺は一介の旅のもの。役に立たなくつちや、無駄なものは無駄。でも聞けば、なんでも東京の大学の、地質学教室とかへ行つたそうだ。そこで役に立っているのなら、ここにいるよりもいい。この野原には役に立つものはあまりおらん。嘆かわしいことだ。

〔吾〕 皆さんのお話、聞いていてもう、泣きたくなりました。あんな立派な方だとは思ひもよらずに、馬鹿だ馬鹿だと。そんな軽率なことの先頭に立つてまことに慙愧ざんきにたえぬ思いでいっぱい。私の作つたあんな歌に腹も立てず、しかも私に新しい歌まで作つてくれた。それなのに、その歌の意味も分からず、面白くないなどと言つたりして、もう。(泣く)

〔司会〕 そう嘆かずに、どうぞ。

〔吾〕 それに人間たちに連れていかれる前、私らに言った言葉をかみしめています。あの時、「吾なんかむしってしまおう」と言われて、私はベゴ石さんの頭からむちられて捨てられました。私は泣きました。

ベゴ石さんはていねい丁寧にきれいな藁やむしろに包まれながら、別れを告げました。あの言葉、まだ残っています。

「みなさん。ながながお世話でした」。そして私には特に「苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたつて下さい」と言ってくれたのです。「みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん」と言いながら荷馬車に乗せられたそうです。

私は、何ということをして……（大泣き）

〔司会〕 苔さん、ありがとうございます。いいお話をたくさん聞かせていただきました。

さてこれにてベゴ石ゆかりの岩手山麓にて開催されました、連れていかれたベゴ石を偲ぶ「ベゴ石を偲ぶ座談会」を終了させていただきます。司会は遙か天空より、まんまる大将こと日輪太郎が務めさせていただきます。ご出席の皆さま方には深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

おやもう黒い雲が始めました。ではこれにてほんとうの終了といたします。

皆さまご機嫌よろしう。また会いましょう。（拍手）



地人館 E-books デモ版

*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

宮澤哲夫 (みやざわ てつお)

1935 (昭和 10) 年 長野県松本市生まれ
早稲田大学第一文学部英文科卒業
東京工業高校 (現・日本工業大学駒場高校) 勤務 (1961~2000)
宮沢賢治研究会会誌『賢治研究』編集委員 (1992~2002)。
宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事 (1999~2002 / 2009~12)
鎌倉・賢治の会会長 (2005~14)・現顧問
三鷹大沢・宮沢賢治の会主宰 (2015~)
[著書]
『宮沢賢治 童話と〈挽歌〉〈疾中〉詩群への旅』蒼丘書林 2016
[受賞]
第3回宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞 2018

賢治寄席へようこそ II

著者 みやざわてつお 宮澤哲夫

初版発行 2021 年 4 月 2 日

発行 ちじんかん 地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2021 Tetsuo Miyazawa